

## 夕張炭鉱遺蹟の観光資源化について : 観光学と産業考古学の見地から

MURAKUSHI, Nisaburo / 村串, 仁三郎

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

67

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

121

(終了ページ / End Page)

162

(発行年 / Year)

1999-07-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004181>

# 夕張炭鉱遺蹟の観光資源化について

——観光学と産業考古学の見地から——

村 串 仁三郎

## 目 次

はじめに

- (1) 産業遺蹟の観光資源化の意義
- (2) イギリスの経験
1. 旧産炭地夕張市の過疎化
2. 過疎化対策としての炭鉱遺蹟の観光資源化構想
3. 「石炭の歴史村」観光の建設投資
4. 夕張市の活性化と「石炭の歴史村」観光の経営
5. 夕張市の観光開発の問題点

## はじめに

### (1) 産業遺蹟の観光資源化の意義

かねてより私は、産業、文化、歴史などの遺蹟の観光資源化について考えてきた。小論は、筆者が1994年に産業考古学会でおこなった「産業考古学と観光」と題する報告と1998年に日本観光学会でおこなった「産業遺蹟の観光資源化」と題する報告を基にして大幅に加筆・修正したものである。

さて、日本では観光学と産業考古学の見地から産業遺蹟と観光・レジャーとの関係について積極的に論じるのは、おそらく筆者がはじめてではないかと思われる。では産業考古学と観光・レジャーとは、どんな関係があるのであろうか。

そもそも観光資源とは、一般的に言えば、人々があえて観光の目的で移動し、観光の対象となりうる何らかの特定の自然（山、海、川、海岸、森、風景、温泉などの自然）、あるいは特定の地域の文化、民俗、芸術、産業、とくにそれらの歴史的な遺蹟などである、ということであろうか。

そして観光資源化とは、そうした自然や文化、民俗、芸術、産業、歴史とくにそれらの遺蹟といったものを、具体的に観光の対象として、観光客に供給することであり、潜在的な観光資源を顕在的な観光資源に転換していくことである。潜在的な観光資源は、それ自体としては、まだ現実に観光資源たりえない。潜在的な資源を観光資源として活用するためには、潜在的な観光資源を観光資源として発見し、認識し、観光に耐えうるものに保護したり保全したり改善して、観光客を迎えうる適当な施設、交通アクセスを整備しなければならない。いわゆる観光開発を施さなければならない。

私は、だいぶ以前に海外研修のため3年ほどイギリスで暮らしたことがあるが、日本の鉱山史を研究していた関係で、イギリスの鉱山遺蹟を見学し、さらには産業考古学と出会い、各種の産業遺蹟を見学してきた。また労働経済の研究者としては、イギリスの勤労者の生活への関心から、彼らの働くだけの生活ではないレジャーライフ（遊ぶ生活）に関心をいだき、イギリス人大衆とともに、国内外を旅行し、観光を楽しみ、彼らのレジャーライフを追究した<sup>(1)</sup>。それが契機となって、私は、観光をふくめレジャーの研究をはじめることになった<sup>(2)</sup>。

イギリスやヨーロッパで感じたことの一つに、イギリスにかぎらず、ヨーロッパでは、自然にくわえ、文化、歴史といったものが観光資源の中心になっているということであり、自然を大切にし、さらに文化や歴史を観光資源として重視し、よく保存することに努めていることである。

そうした実感は、その後、イギリスのナショナルトラストやナショナルパーク（通常国立公園と訳されている）について研究して、いよいよ私の実感が正しかったこと、イギリスにおける自然や文化、歴史の観光資源化

が、実に長い歴史をへて、積極的な先人の努力によって実現したものであることを知って、むしろ驚かされたのである。

そもそも日本では、観光などというものは、レジャー同様に文化的にも学問的にも、いささか低く見下げられてきたきらいがある。そのためもあって、観光資源が粗末にあつかわれてきた。

日本でもよく知られるようになったイギリスのナショナルトラストは、ずいぶん高尚な運動のように思われているが、事実そうなのではあるが、設立の目的は、「美しいあるいは歴史的に重要な土地と建物を国民の利益のために永久保存する」<sup>(3)</sup> ことであり、「国民の利用」に供することである。そしてナショナルトラストの当事者にいわせるならば「トラストの資産は現在、イギリスの最大の産業となっている観光業に、将来より以上に成長する可能性を与えている」のである<sup>(4)</sup>。ナショナルトラストは、決して文化至上主義でも歴史至上主義でもなく、観光業に観光資源を大量に供給していることを自認している。

ひるがえって日本の現状を一瞥すると、まったく逆の傾向に出会う。

日本では、観光資源としての自然や文化、民俗、芸術、産業、歴史、とくにそれらの遺蹟をあまり大事にせず、あまりにも粗末にあつかいすぎ、自然保護の意識が弱く、観光業者も観光客も、すすんで自然を破壊し、環境汚染を許容し、文化、民俗、芸術、歴史についても荒廃に無頓着であり、積極的な保護、保存、ようするに観光資源化を著しくないがしろにしていたように思える。

日本では、江戸時代から観光が盛んで、長い歴史をもち、興味深い点も少なくはないが、近代の観光は、観光客の興味、ニーズ、あるいは観光業の供給するサービスが、「花より団子の意識」を基調にし、観光の目玉を、食べること、土産品、宿泊施設などの豪華さなどのいわゆる「モノ化する観光」に偏向してきたように感じられる<sup>(5)</sup>。

何故そうなるのか。私の感想を指摘すれば、第1に、日本人は、明治維新以来、西欧からの遅れに追いつくことばかりを考え、もっぱら産業の発

展を願い、鉱工業品の輸出に専念してきたため、外国から新しい技術や文化を移入し、歴史や伝統を軽んじてきたことがあげられる。

そうした日本の事情は、文化的歴史的な観光資源にたいする無関心を生んだといえよう。たとえば古都京都の観光資源としての荒廃は、ヨーロッパの古都と比較すると著しい。それは、京都（の人々）が、古都としての観光資源にあまりにも無関心で、古都の風景、景観を無視した高層建築や建造物の乱立を認める都市開発を招いた結果である。

第2に、私は、日本人の遊び意識、あるいは美意識に問題を感じない訳にはゆかない。日本人は、日本ではあまりに自然が豊かなためか、自然の大切さ、自然の美さにかなり鈍感になっているように感じられる。日本の自然観をひもとけば古来からそうであったわけではないことがわかるが、近代、とくに戦後の日本人の自然観は、自然の乱開発を許容しているように、実にいいかげんである。

イギリスにおいては、ナショナルトラストにみられる自然、景観の重視が、産業革命による自然破壊の反省に負おうことが大きいのにたいし、日本にはそうした経験が薄い。明治維新以来、殖産興業のスローガンで突っ走ってきたし、戦後の開発主義は、自然を無視し、景観や風景の犠牲を強いて反省することが少ない。むしろ産業革命期のイギリスの経験を今われわれは経験しているのかも知れない。

現代の日本人には、真に自然を慈しみ、景観や風景を楽しむ意識が稀薄であり、自然を楽しむべき日本の湖畔や山野は、都市近郊の場合など、小都市化し、レストランが乱立し、土産物屋が氾濫し、喧騒が充満している。

人々は、レストランでの飲み食いに熱中し、不釣合な景観、痛めつけられ歪められた風景に無関心である。こうした日本人の美意識を、私は「花より団子の意識」に基づくものと考えている。日本人大衆の個々の美意識は、たとえば日常の雑器や美術品への観賞意識などでは、大変優れていると思うのだが、自然美ことに風景とか景観、町並み、全体的な都市空間については全く美意識を欠いている。だから観光業の側も、風景や景観自体

を観光資源と意識する度合いが弱い。

第3に、私は戦後日本人が身につけた唯物主義的意識（欲求）、即物的な「花より団子」的物欲主義について指摘せざるをえない。日本人は、なにも自然軽視だけにとどまらず、とくに文化や民俗、芸術、産業、歴史などの遺蹟にたいしても著しく無関心となっている。

物的開発にたいする熱心さに逆比例して、日本人は、自分たちが築いてきた経済、産業、技術の成果、歴史を後世にのこしたり、それから教訓をえようとする歴史意識がひどく欠如している。某自動車製造会社の戦後第1号の乗用車が、自社にのこっていないというような事態は、それを象徴している。

イギリスでは、とくに産業上の遺蹟、遺物を後世にのこし、歴史研究に資するだけでなく、歴史教育に貢献し、さらには観光資源とし、レジャーの対象にして楽しませている。そして産業考古学がそのために大きな役割を果たしている。しかし日本では、産業遺蹟、遺物にたいする関心がことのほか貧弱であり、産業考古学（会）自体も弱体である。

## (2) イギリスの経験

私は、在英中の3年間、いろいろな産業遺蹟、歴史遺蹟、そしてレジャー施設を見てきたが、ここでは、その中で大変印象的で、日本にとって重要かつ大きな意義のあると思われる二つの事例について簡単に報告しておきたい<sup>(6)</sup>。

私は、炭鉱史調査のためスコットランドを訪れた際に、日本人にはよく知られているロバート・オーエンが設立したニューラナークの紡績工場に2回ほど立ちよった。大変感動的であったが、10年前にはじめて立ちよった時には、まだレンガの巨大な建物群は、半壊したままのものもあり、十分に補修、復元されていなかった。しかし風光明媚な丘陵地の傾斜と溪流のふちに建てられた工場は、巨大な水車を動力としたマニュファクチュアールの紡績工場の意味を一見して明瞭に示していた。そしてオーエンが追及し

たヒューマンな社会主義的な実験の試みをのこす、工場敷地内の学校や病院の跡が、抽象的な歴史ではなく、具体的な歴史遺蹟のリアリティーをわれわれ現代人の前に開示していた。

5年前2度目にいった時は、建物の外観の復元と補修がだいぶすすんでいて、たくさんの見学者が訪れ、にぎやかであった。工場の一角には移動する椅子に乗って、この工場とオーエンについての展示をイアホーンの説明つきで（日本語もふくめ各国語あり）巡回する楽しめる施設もつくられ、大きな土産物店やレストハウスも出来上がって、繁盛していた。

共産主義が敗北したからではなかろうが、エンゲルスによって空想的社会主義と批判されたイギリス社会主義の実験の遺蹟が、ここでは観光資源として、脚光を浴びていることがわかる。しかも驚くべきことは、18世紀末に建てられたこうした産業遺蹟が今日まで完全に破壊され、消滅されないで残存していたことである。その理由は、何だったのであろうか。十分考えてみる価値がある。

その理由の一つは、イギリスの歴史的な建築物全体にいえることだが、建物がレンガや石でできており、耐久性が強かったことであろう。しかしこれは、建物の物理的性格にすぎない。第2の理由は、この巨大な工場が、戦後の1960年代まで現実に工場として使用されてきたことである。約200年前に造られたものが、ついこの間まで使用されてきたというのは、如何にもイギリス的なのであるが、そこには、日本のように古いものを簡単に廃棄、消滅させてしまう精神と根本的に異なった精神があるように思われる。

そうしたイギリス人の古いものを大切にすることは、1960年代の技術革新と合理化、そしてイギリス繊維産業の国際競争での敗北による繊維産業の衰退、崩壊によって立ちゆけなくなったニューラナーク工場が放置され荒廃した時に、この歴史的な産業遺蹟を復元し保存しようとする運動を生み出したのである。だから第3の理由は、70年代からはじまった、ニューラナーク工場を保存しようとする心ある関係者やスコットランド人有力者

と周辺的一般住民の運動、さらにそれを財源的にささえた政府補助の存在であった。保存運動は、ニューラナーク保存トラストという公益団体を中心に展開された。

つぎに、ノースヨークシャーにある世界最古の旅客鉄道とそこを走る蒸気機関車の保存と観光化についてふれておきたい。

ノースイングランドのヨーク市の近くにピッカリングという小さな町がある。この周辺は、ノースヨークシャー・ムーアーズと呼ばれるナショナルパークとなっている風光明媚な地域としてよく知られ、イギリス人がホリデーを楽しむためにたくさん集まってくるリゾート地域である。このピッカリングからグロスモントまで約1時間、ムーア（丘陵）とデール（小さな谷間）の間を蒸気機関車を走らせて観光客を楽しませている。

この鉄道は、もともと1836年に鉄道の父と呼ばれたジョージ・スチーブンソンによって開設された世界最初の旅客鉄道だったが、現在は、North Yorkshire moors railway enterprise 社の経営により観光用に当時さながらの蒸気機関車を走らせている。もちろん日本でもこうした例は見られるが、日本と全くちがっている点は、企業が、Historical railway trust という公益団体を設立して基金を集め、さらに営業コストを節約するために、機関車の運転、踏切、チケット売りなどにボランティアの参加を呼びかけ、貴重な歴史産業遺産を保護し、後世にのこそうとしていることである。

しかし問題はここで終わるのではない。この鉄道に乗るために多くの老若男女が集まってくる。しかし人々はただ鉄道だけを楽しみにきているのではない。客のほとんどがマイカーである。彼等は、ピッカリングから蒸気機関車に乗って、車窓から素晴らしい景色を眺め、ロコモティブに乗って満足し、途中の駅に下車しては、何時間か山歩きをして楽しむのである。

ここに歴史的産業遺産を体験し楽しむというレジャーは、単発の行為としてあるのではなく、ナショナルパークの中の自然と絶妙な風景の中をイギリス人がこよなく愛する山歩き（彼らの言葉でいえば、walking）とい

うレジャー活動と連結しており、かつ日本人のように過密な行楽プランではなく、余裕のある休暇（1週間とか、少なくとも3、4日）をとってのんびりと時を過ごす慣習との関連の中にあるということなのである<sup>(7)</sup>。

このほか私が感心した産業遺蹟、博物館がたくさんあるが、紙幅がないので、別の機会に報告することにした。

もっともこうした歴史的な産業遺蹟を保存しようとする運動は、突然に起きてきたのではなく、歴史的な建造物や美しい自然や風景をのこそうとした19世紀末から起きてきたナショナルトラスト運動、そしてそうした運動を社会的に認めてきたイギリスの政治や法律の体質を背景にしていたことを理解しなければならない。

とくに戦後の労働党政権が、展開した福祉国家政策の一貫としての国民一般や勤労者階級のためのレジャー政策は、一般的に自然的、歴史的、産業的な遺蹟を保存する運動の基盤をつくったのである。イギリス産業考古学もまた、1960年代のイギリスのレジャーの大衆化、大衆文化の進展の中で、発展したのであった<sup>(8)</sup>。

そして最後に強調しておきたいことは、産業遺蹟の保存は、こうした産業遺蹟の観光化によって実現しているということであり、産業遺蹟を末永く存続させているということである。

きわめて簡単なイギリスの経験を紹介したにすぎないが、私は、これらの経験を つうじて、日本の産業考古学と観光、レジャーの問題に関してここで二三の問題点を提起してみたい。

産業考古学会の面からいえば、産業の技術や遺蹟の保存にたいする意識を高めることは当然だが、そのためには地域の人々に、産業遺蹟が重要な観光資源であり、レジャー活動の対象であることの理解を深め、かつ会員を拡大していくことが大事である、ということである。

また、産業考古学のアマチュアリズムを最大限に活用し、広範な人々に産業遺蹟復元、修復、維持の活動に参加をもとめ、もとより関連企業や政府、自治体の支援はいうまでもないが、それだけにたよることなく、より

多くの広範な産業考古学会員のボランティア活動を学会が中心になって指導し展開していくことが望まれるのである。

さらに歴史産業遺蹟が観光の資源であり、レジャーの対象であるにしても、それが単発のものとして存在するかぎり、その価値は半減してしまう点に留意しなければならないであろう。産業遺蹟は、観光資源化することによって、産業遺蹟を保護するための資金を維持し、観光客にその意義を衆知し、産業遺蹟自体の質を高めると同時に、観光の質をさらに高めていくことになる。

日本の産業考古学会は、目下会員の増加が頭打ちとなり、会員の拡大の必要が指摘されている。ところで日本の産業考古学会の会員は、どのような人達が参加しているのだろうか。第1表は、産業考古学会の会員の職業を分類したものである。

会員の中心は、大学の研究者（33%）であり、中高専門学校（12.8%）をふくめれば教育関係者が半分をしめている。それにたいして博物館・記念館等の関係者は8.1%にすぎず、官庁関係（4.2%）も少ない。

外国の事例を瞥見するに、たとえば国際鉱山史学会などには、大挙して鉱山博物館や鉱山所在地の公務員（観光課）の職員などが参加していると

第1表 産業考古学会員の職業

職 種	人 数	構 成 比
大学、短大、院生を含む研究者	188	33.0
小中高、専門学校の教員	73	12.8
博物館、記念館勤務者	46	8.0
社団、財団等の勤務者	13	2.2
民間企業の勤務者	109	19.1
民間調査、研究機関勤務者	22	3.8
官庁勤務者	24	4.2
書店、ジャーナリズム勤務者、その他	27	5.7
不 明	67	11.2
合 計	569	100.0

(注) 1998年度産業考古学会名簿より作成。

聞く。こうした傾向にかんがみ、日本の産業考古学会は、今後、各地の産業遺蹟や産業博物館、記念館などの職員、さらに産業遺蹟を抱えている地域の観光課の職員などに参加をもとめていく努力をするべきであろう。また産業遺蹟の保護運動を一層展開し、ボランティアとしてそれらに参加している多くの一般人に、産業考古学会に参加してもらうように勤めるべきであろう。

そうした中で、産業考古学会と地域の観光と関連を研究し、産業遺蹟が有力な観光資源になりうることを理解してもらい、観光と産業遺蹟の相互の発展を追及していく必要があるのではなかろうか。

またレジャー論の観点からいえば、日本のレジャーは、単に金をだしてレジャー対象を買うことに重点をおいているが、そうした点を反省して、文化的なボランティア活動を人々の重要なレジャー活動の一つであることを確認して、歴史産業遺蹟の復元、修復、維持をボランティアとしてのレジャー活動として組織し、広めていくことが重要である。

観光学の面からいえば、すでに指摘したように、大量生産大量消費の経済倫理をすてて、従来の唯物的、即物的、非文化的、非美学的、非歴史的な観光を反省し、資源枯渇の時代に、地球環境を守り、大切に保護し、少ない資源を抑制的に活用し、持続的な観光資源の維持をはかる新しい視点から観光学の再構築が必要である。

私は、今、日本の国立公園の問題を観光論・レジャー論の観点から取り上げ、国立公園をめぐる観光開発と自然保護、文化歴史遺蹟の保護、保全の問題を検討し、21世紀の新しい観光学の構築に努めようと考えている<sup>9)</sup>。

#### 注

- (1) 拙稿「イギリス人庶民のゴルフライフ体験記」、雑誌『労働レーダー』1990年3月～7月号、「イギリス庶民のレジャーライフ体験記」『労働レーダー』1991年8月～12月号、参照。
- (2) 拙稿「現代レジャーの概念について」、『経済志林』第65巻第4号、1998年3月、「現代レジャー論の研究対象」第66巻第1号、1998年7月、参照。

- (3) ナショナルトラスト法第4条, 1907年。
- (4) マーフィ『ナショナル・トラストの誕生』(四元忠博訳), 緑風出版, 1992年, 10頁。
- (5) 日本人の独特の観光行動については, 加太宏邦稿「日本の観光プラティクと余暇問題」を参照。村串・安江編「レジャーと現代社会」所収論文, 法政大学出版会, 1999年3月。
- (6) イギリスの産業遺蹟については, いくつか貴重な報告があるが, ここでは, Fred Dibnah, INDUSTRIAL AGE, A GUIDE TO BRITAIN'S INDUSTRIAL HERITAGE, 1999年, BBC, をあげておく。なお亀田光三「英国産業考古学の活動に学ぶ」『産業考古学』第90号, 1998年11月, も簡単ながらイギリスのアイアンブリッジとアークライト工場の保存運動についてふれており, 小論の問題意識につづる点が多い。
- (7) ニューラナークの工場およびピッカリングの鉄道の保存運動については, 現地調査を踏まえて近々に報告する予定である。
- (8) 詳しくは, 拙稿「イギリスの福祉国家型レジャー政策について」『大原社会問題研究所雑誌』NO. 445, 1995年12月号参照。
- (9) 国立公園に関する研究については, 本誌次号から掲載を予定している。

## 1. 旧産炭地夕張市の過疎化

日本においても, 産業遺蹟の観光資源化の事例がかなり存在する。たとえば私の研究分野の鉱山関係でも, かつて有名をはせた多くの鉱山で鉱山遺蹟を博物館として存続させ, 鉱山観光を事業化している。三菱系では, 新潟の佐渡金山, 兵庫の生野銀山, 秋田の尾去沢銅山, 伊豆の土肥金山, さらに古河系では栃木の足尾銅山, 炭鉱では北海道の夕張炭鉱, 福島の常磐炭鉱などが, 比較的大きな鉱山博物館として鉱山遺蹟を観光資源として, 鉱山観光をおこなっている。その他, さまざまな産業遺蹟が観光資源化されており, 産業遺蹟の観光業に占める地位は決して小さくはない。毎年各鉱山博物館には数十万人が足を運び, 炭鉱や鉱山の産業史を学び, 経験し楽しんでいる。しかし観光業において, 一般社会において産業遺蹟の観光資源としての役割や意義が十分に認識されているとはかぎらない。



夕張市は、戦前から戦後の1960年頃までは北海道の石炭業の中心地として栄えた。しかし貿易自由化により、安価な石油が輸入されるようになり、石炭需要は激減し、夕張市の石炭業も衰退しはじめた。第2表に示したように、1960年に17あった炭鉱は、70年には9鉱、80年には3鉱、そして89年には最後の1鉱が閉山し、炭鉱の町、夕張の灯が消えた。産業の衰退、消滅は、炭鉱従業員の減少、消失、人口の激減、町の過疎化をもたらす。

1960年には16,027人いた炭鉱従業員は、70年には9,617人、80年には5,202人、そして閉山時89年には885人、そして翌年に残務整理者の少数となった。当然市の中心であった炭鉱関係の人口が減少し、消滅すれば、夕張市の総人口の減少がすすむ。

第3表に示したように、戦前戦後をつうじてピークであった夕張市の総人口は、1960年に116,908人だったが、70年には69,871人に、80年には41,715人、最終的な炭鉱閉山の翌年90年には20,969人に急減した。その

第2表 夕張市の炭鉱数・生産量  
及び従業員数

年度	炭鉱数	生産量 (千t)	従業員数 (人)
1955	15	2,254	17,294
60	17	3,297	16,027
65	11	4,036	11,025
70	9	3,762	9,617
75	5	3,173	6,290
80	3	2,653	5,202
82	2	2,056	3,141
83	2	1,845	3,094
85	2	1,528	2,796
86	2	1,710	2,657
87	1	935	998
88	1	627	958
89	1	522	885
90	0	0	—

(注) 夕張市『夕張の概況説明』  
1998年による。

第3表 夕張市の人口の推移  
(国勢調査より)

年次	所帯数	総数	男	女
1940	11,582	64,998	35,983	29,015
47	15,141	82,123	43,812	38,311
50	19,359	99,530	52,337	47,193
55	21,218	107,332	54,850	52,482
60	25,156	116,908	59,416	57,492
65	21,070	85,141	42,525	42,612
70	19,862	69,871	34,682	35,189
75	15,944	50,131	24,650	25,481
80	14,992	41,715	20,715	21,000
85	12,152	31,665	15,628	16,037
90	8,791	20,969	10,078	10,891
95	7,593	17,116	8,012	8,989

(注) 前掲『夕張の概況説明』より。  
※H9(住民基本台帳7月1日)  
7,859世帯, 16,881人(男8,066, 女8,815)

後人口は減少しつづけ、95年には17,116人となり、1960年のピーク時の14.6%にまで減少してしまった。

夕張市の炭鉱中心の産業構造は、当然大きな転換をせまられた。第4表に示したように、1980年には、産業人口に占める炭鉱のウェイトは、すでに36.8%にまで縮小していたが、85年には26.3%にまで縮小し、炭鉱の全面的消滅によって、90年には産業から炭鉱従業員の姿が消えた。

夕張市の過疎化は、市内の住民居住地の消滅というドラスティックな形で現れている。第5表に示したように、炭鉱の閉山によって、一居住地に人がいなくなるのである。地域の無人化は、その後いっそうすすんだはずである。

第4表 夕張市の産業別人口の推移

(国勢調査より)

産 業 別	1980年		1985年		1990年		1995年	
	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比	人数	構成比
第一次産業	1,200	6.5	1,124	8.2	1,013	12.1	990	13.1
農 業	871	4.7	865	6.3	854	9.9	889	11.8
林 業	328	1.8	259	1.9	189	2.2	100	1.3
漁 業	1	0.0	—	—	—	—	1	0.0
第二次産業	9,444	51.3	5,857	42.7	2,265	26.3	1,867	24.7
鉱 業	6,766	36.8	3,608	26.3	104	1.2	10	0.1
建 設 業	1,199	6.5	955	7.0	1,103	12.8	899	11.9
製 造 業	1,479	8.0	1,294	9.4	1,058	12.3	958	12.7
第三次産業	7,784	42.2	6,721	49.1	5,296	61.6	4,697	62.2
電気・ガス・熱供給業・水道業	190	1.0	141	1.0	100	1.2	84	1.1
運輸・通信業	1,043	5.7	904	6.6	600	7.0	468	6.2
卸売・小売業・飲食	2,630	14.3	2,119	15.5	1,618	18.8	1,406	18.6
金融・保険業			239	1.7	150	1.7	108	1.4
不動産業			17	0.1	9	0.1	17	0.2
サービス業	2,948	15.9	2,627	19.3	2,245	26.1	2,088	27.7
公 務	684	3.7	674	4.9	547	6.7	526	7.0
そ の 他	2	0.0	—	—	—	—	—	—
総 数	18,428	100.0	13,702	100.0	8,604	100.0	7,554	100.0

(注) 前掲「夕張の概況説明」による。

第5表 夕張市の無人化過疎化地域推移

(単位：人)

字 別	1960年	65年	70年	75年	80年	83年4月	摘要
丁 未	3,277	1,950	1,071	169	0	0	北炭(株)
錦	1,349	917	704	145	0	0	夕張炭鉱地区
小 松	584	466	372	127	0	0	〃
富 岡	1,045	847	520	220	14	4	〃
福 住	6,097	4,582	2,406	889	491	297	〃
住 初	1,238	968	669	366	269	194	〃
高 松	5,477	4,117	2,969	1,551	721	122	〃
社 光	3,565	2,661	1,810	1,153	686	437	〃
鹿島明石町	1,232	930	815	58	42	30	三菱(株)
〃 錦 町	1,024	673	550	61	56	55	大夕張炭鉱地区
〃 代々木町	1,382	1,050	887	234	141	92	〃
〃 春日町	1,752	1,168	1,041	29	18	12	〃
〃 弥生町	1,181	1,156	963	0	2	2	〃
〃 常盤町	1,275	833	841	4	0	0	〃

(注) 中田鉄治『石炭の歴史村オープン記念報告書その発想の背景と展望』, 1983年6月による。

(資料) 国勢調査(但し, 現在人口は企画部)

このような産炭地の過疎化は、炭鉱従業員の大量失業、地域的大失業という悲劇をとまなう。私のように、長い間炭鉱史を研究してきた者として、こうした事態は、非常に堪え難い事である。もちろん炭鉱で働いてきた人々のその悲しみと憤りは、はかりがたいものがあるであろう。

中心的な産業をうしない、人口の減少をまねいて市の財政は、当然窮迫をまねがれない。かつて鉱産税、固定資産税など炭鉱関係の税金に依存していた市財政は、その支えをうしない、深刻な財政危機を迎えなければならなかった<sup>(1)</sup>。

日本社会のエネルギーを一手に担ってきた石炭業は、産業の栄枯盛衰とはいえ、無残にも衰退し、消滅した。そうした過程に生きた人達が夕張市民であり、その夕張市民が、衰退する産業に代わって、新しい産業の成育をもとめて、奮闘して捜し当てた産業こそ観光産業であり、炭鉱遺蹟を観光資源として夕張市を観光化することだったのである。

## 注

- (1) なお小論は、外国で執筆しているために、手元に夕張市の財政データを欠き、夕張市の財政危機について詳しい分析を割愛しなければならなかったが、別の機会に補足したい。

## 2. 過疎化対策としての炭鉱遺蹟の観光資源化構想

多くの産炭地がそうだったように、炭鉱の閉山は、人口の霧散、地域の過疎化と消滅を意味した。しかし夕張市は、最後の炭鉱が消滅する12年も前から、すなわち1977年から産炭地の過疎化にたいして対策をたて、過疎化の抑制、地域の振興に努めてきた。こうした地方自治体の試みは、おそらく日本の産炭地・鉱産地で唯一の事例であろう。

炭鉱業の斜陽化が進展し、ようやく3炭鉱が生きのびていた1979年4月に、夕張市は、現役市長の出馬を辞退させて無投票で中田鉄治を市長に選出した。産炭地の夕張市では地区労働組合協議会(地区労)のおす社会党系(しばしば炭鉱労組出身者)の候補者が市長を勤めるのが一般的であったが、中田は、戦時中の一時期炭鉱に席を置いていたとはいえ、敗戦直後から夕張市の職員として働いてきた人物であり、彼の市長就任は、異例の事態だった。

夕張市の観光政策の実施は、この人物を無視しては何も語れない<sup>(1)</sup>。

中田鉄治は、1925年秋田に生まれたが、4カ月の幼児の時に家族とともに夕張に移り、以後夕張で育った。建設業を営んでいた父親の事業が思わしくなく、中学もいけず、少年時代に銀行で事務見習いとして働き、簿記などを独学で勉強した。1944年3月に徴用令により北炭夕張炭業所に入社、石炭の原価計算などに従事していた。敗戦直後市役所に採用され、以後市の職員として活躍することになる。

市役所では、中田は、銀行で身につけた経理能力を買われて、出納課、財政課に勤め、かたわら1947年に市の職員組合の組織化に参加し、その

後青年部長として活躍する。しかし仕事の面でも1956～57年税務課の係長として市の行政の中心で働き、その間1960年まで市職労組の書記長、委員長などを歴任している。

しかし1860年に中田は、突然労働組合活動から足をあらい、当時市職の日の当たらない場所であり、左遷の場所であったといわれていた市教育員会にみずからすすんで転動し、社会教育行政に活躍した。そして市政懇談会や市政研究会を主催した。そうした中田の才能と活動力を買われて、1967年11月に41歳の時、夕張市役所企画室長に任命された。時あたかも炭鉱の合理化・閉山が進展しはじめ、夕張市の財政危機が叫ばれていた時期であった。夕張市は、67年8月に財政再建特別措置施策を策定し、財政再建に着手していたが、その前提の長期計画、長期ビジョンがまだ存在しなかった。ビジョン策定の役目が中田に託されたのであった。

彼は、持ち前の研究熱心さで、夕張市再生のための総合計画を検討し、1970年12月に「夕張市総合開発計画基本構想」を策定して議会に提出した。

構想の骨子は、石炭産業は10年程で壊滅するという立論によって、夕張市の再生を新しい産業づくり、石炭依存体質の改善をおこなうというものであった<sup>(2)</sup>。そもそも、1970年の段階で石炭産業が10年ほどで壊滅するというような認識は、炭鉱関係者、とくに炭鉱労働組合の指導者にはまったく考えられないことであった。中田のように、石炭業から一歩ひいた立場で、冷静に考えないと生まれてこない発想であった。かくしてこの構想は、市議会などで厳しい批判にさらされたようである。しかし中田は信念を変えず、むしろ市長や議員を説得したといわれている<sup>(3)</sup>。

こうして中田の能力を認めた新しい市長吉田久は、71年に若干45歳の若い中田を市助役に抜擢したのである。市行政の中心に座った中田は、みずから企業誘致にかけまわったが、決して思わしい結果がえられなかった<sup>(4)</sup>。そこで中田は、夕張市独自の開発方途を考えだした。それが夕張市の観光化のアイデアであった。

中田のアイデアで72年に冷水山に国際スキー場が開設され、73年には、丁未風致公園の造成が着工され、74年には、夕張第2坑の坑口近くの石炭の大露頭が北海道の天然記念物の指定をうけ、75年に園芸センターが設立されている。夕張市の観光化アイデアのはしりである。

さらに中田は、その後の炭鉱の閉山、衰退の加速事情を見て、1974年に「炭鉱都市改造構想」を策定し、総合開発構想の軌道修正をはかった。そしてここで、石炭博物館の建設と研修所として設立された模擬炭鉱周辺を整備して観光資源とするアイデアを提出した<sup>(5)</sup>。

こうしたアイデアをいっそう発展させたのが、「石炭の歴史村構想」である。この構想は、74年の「都市改造構想」の中で示された観光開発構想をいっそう具体化したものであった。この構想を現実化させる大きな契機となったのは、1977年、夕張市の発祥の地にあり、また東洋一をほこる設備をようする北炭夕張新第二炭鉱の閉山決定であった。中田助役は、市長から閉山対策本部長を命ぜられ、対策に頭を悩ませた。中田は後につきのように報告している

「いままでのような、あと始末ばかりの対策では、過疎化という後遺症は次第に悪化して野たれ死にを待つまでとなるにちがいない。すでに石炭博物館の建設と模擬炭鉱周辺の整備を、都市改造構想のなかで打ち出してきた本市は、これにみどりの山峡の景観や遊園地を加えて、一大ゾーンに発展させ『石炭の歴史村構想』として発表した。すなわち、黒ダイヤとうたわれた石炭を活かし一大観光開発事業をおこし、石炭斜陽のマチ夕張の暗いイメージを転換させ起死回生の起爆剤にしようというねらいである。」<sup>(6)</sup>

まだ炭鉱が現存している時期に炭鉱を観光資源化し、夕張市を観光地にする「石炭の歴史村」を建設するなどという計画は、市会議員や炭鉱関係者から「石炭を歴史化するとは、何事か」と激しい反対に見舞われたという<sup>(7)</sup>。しかし冷静に考えれば炭鉱の衰退は不可避であり、炭鉱の再興など不可能であった。中田の計画案は、次第に市民の共感をえていき、1973

年の春市議会の反対を説得して議会の承認をとりつけた。

「石炭の歴史村」観光構想の要点は、1974年に北海道の天然記念物に指定された炭層の大露頭と模擬坑としてのこされていた天竜坑を中核とする北炭新第2炭鉱の跡地「約15ヘクタールの長方形の土地に、…1978年度から5カ年計画で、総額55億を投じ、学ぶ・遊ぶ・憩うという3つの要素を複合した一大観光拠点をつくろうとするものである」<sup>(8)</sup>。

観光施設は、当初の計画では、博物館、石炭風俗館、炭鉱機械館、史蹟夕張鉱を中心とする『石炭博物館ゾーン』に、周辺の宿泊施設、公園、レクリエーション施設の建設であった<sup>(9)</sup>。

しかし日本ではじめての産業遺蹟の大々的な観光化による地域振興は、大変な困難とそれを克服するための努力をともなうことになった。

この観光開発構想は、1978年に実現のための工事が着手されたが、この構想を最後まで完成させるためには、強力な行政のリーダーシップが必要だったにちがいない。それは、結局、この構想を作成した中田鉄治を夕張市長に担ぎ出すことであった。1974年4月は、夕張市の市長選挙の年であった。すでに73年末には、現市長の吉田久が、定石どおり、夕張市の地区労推薦で再選出馬が決まっていた。

しかし炭鉱衰退の真っ直中にあった夕張市民は、中田鉄治の政治手腕を評価して、中田を市長にしないかぎり、夕張市の再興、いな存続はありえないし、また観光化構想の実現もありえないと考えたのである。年末に夕張市の有力者が集う「明日の夕張を築く市民の会」が組織され、鳩首会議を開いて、中田を市長にすえることを話しあった。中田の方はなかなかイエスとはいわなかったが、結局、すでに三選出馬を表明していた日本社会党候補で地区労推薦の吉田久を出馬辞退させて、中田鉄治は、無投票で市長に当選した<sup>(10)</sup>。こうしてわが国ではじめての炭鉱遺蹟を中心とする観光施設の建設が本格的に実現する体制が整備されたのである。

## 注

- (1) 中田鉄治については、青野豊作『夕張市長まちおこし奮戦記』、PHP、1982年、があり、中田鉄治の人となり、および彼の観光開発、夕張市の町起こしについて、詳しく論じている。小論は、氏の著作に教えられることが多かった。記してお礼の言葉に代えたい。
- (2) 同上、65～7頁。また中田鉄治『石炭の歴史村オープン記念報告書 その発想の背景と展望』（パンフレット）、1983年6月、8頁。
- (3) 青野前掲書、67頁。
- (4) 同上、72頁。
- (5) 前掲中田鉄治『報告書』、4～5頁。
- (6) 同上、5頁。
- (7) 青野前掲書、79頁。
- (8) 前掲中田『報告書』、5頁。
- (9) 夕張市「夕張観光開発事業の経緯」による。
- (10) 前掲青野書、14～6頁。

### 3. 「石炭の歴史村」観光の建設投資

夕張市の観光開発計画は、1974年に中田が市長に就任してから急速に実施されていった。これは、その後の計画と区別して第1次観光開発計画と呼んでおきたい。「石炭の歴史村」の設備投資の概要は、第6表に示したとおり四つの柱からなっていた。第1の柱は、「石炭博物館」を中心とした四つのユニットからなっている。第2の柱は、「炭鉱生活館」、第3の柱は、「SL館」。第4の柱は「動物館」であった。その他、水上レストラン「望郷」、大型遊園地「アドベンチャーファミリー」、「グリーン大劇場」、宿泊施設「黄色いリボン」、「ファミリースクール・ふれあい」、丁未風致公園などがあった。当初投資総額は55億円という大規模なものであった。

「石炭の歴史村」観光の中心である石炭博物館の基本概要は、「石炭と炭鉱の歴史を広く一般に紹介するため、旧夕張会館跡地に夕張の石炭の歴史村の中核施設として建設」<sup>(4)</sup>された。

第6表 石炭の歴史村博物館施設概要(第1次計画)

	石炭博物館	炭鉱生活館	知られざる世界の動物館	S L 館
(基本概要)	石炭と炭鉱の歴史を広く一般に紹介するため、旧夕張炭鉱跡地に夕張石炭の歴史村の中核施設として建設された。	炭鉱のまち夕張で生活した人々の百年の歩みを紹介し、生われつつある炭鉱の貴重な生活遺産を保存し管理する目的で建設された。	世界中の珍しい剥製を展示。	市内の鉄道関係各社と、SLに深い理解をもった各位から寄贈された炭鉱資料館に保存・展示していた資料と、SLと働いた人々の功績を理解していただくことを願って建設された。
(建築物概要)	(構造) 鉄筋コンクリート造 2階建 一部鉄骨鉄筋コンクリート地下坑内	(構造) 鉄筋コンクリート造 2階建	(構造) 木造平屋、一部2階建	(構造) 鉄骨造平屋建
・構造	敷地面積 5,336.40 m <sup>2</sup> (敷地面積) 1,377.90 m <sup>2</sup> (延床面積) 3,229.71 m <sup>2</sup> (展示面積) 2,241.60 m <sup>2</sup>	敷地面積 931.59 m <sup>2</sup> (敷地面積) 267.30 m <sup>2</sup> (延床面積) 517.55 m <sup>2</sup> ・1階 ・2階	敷地面積 1,229.00 m <sup>2</sup> (敷地面積) 868.70 m <sup>2</sup> (延床面積) 1,224.10 m <sup>2</sup> ・1階 ・2階 (展示面積) 498.90 m <sup>2</sup> (展示面積) 853.90 m <sup>2</sup>	敷地面積 2,113.44 m <sup>2</sup> (敷地面積) 580.66 m <sup>2</sup> (延床面積) 580.66 m <sup>2</sup>
・面責	本館 952.10 m <sup>2</sup> ・炭鉱風俗館 208.80 m <sup>2</sup> ・炭鉱機械館 430.00 m <sup>2</sup> ・史跡夕張礦 356.10 m <sup>2</sup>	敷地面積 250.25 m <sup>2</sup>		
(建設総工費)	※125,459万円	23,334万円	42,969万円	17,174万円
(工事期間)	1979年7月～80年7月	80年10月～81年6月	82年12月～83年6月	79年9月～80年9月
(展示内容)	石炭や石炭産業の歴史と炭鉱で働く人々をテーマに、本館1・2階展示室のほか、立坑ケージ(エレベーター)から続く史跡風俗館・炭鉱機械、そして史跡夕張炭・夕張石炭の大露頭から構成されている。	館体は道立夕張工業高等学校の旧校舎正副部分を100分の80に縮小したもの。館内1階は炭鉱のまち夕張で暮らした人々の生活の一端を紹介。2階は石炭を中心とした夕張の歴史や自然、産業、生活を紹介します。 (展示資料点数) 2,000点	世界中に生息する動物の剥製を生息区域(コーナー)に分けて証明・音響・人口雨等に工夫を凝らした、リアルに動物剥製を紹介している。 (展示資料点数) 1,100点	館体前面が巨大なSLになっており、館内には待合室、駅務室、改札口、プラザポトム、SI-2台、客車1台があり、実際に使った資料を展示している。そのほか写真や図解、模型、三面マルチスクリーン、16ミリ映画、シミュレーションを使用している。 (展示資料点数) 500点
・テーマ				
・資料点数		700点 (展示資料点数)		
(開館年月)	1980年7月	1981年6月	1983年6月	1980年9月

(注) 夕張市資料(1997年)から作成。

※その後、採炭作動館が増設された、投資額は3億7,560万円であった。

建築物の概要は、鉄筋コンクリート造、2階建、一部鉄骨鉄筋コンクリート。敷地面積は、5,336 m<sup>2</sup>、建設面積 1,377 m<sup>2</sup>、延床面積 3,229 m<sup>2</sup>、展示面積 2,241 m<sup>2</sup>、である。石炭博物館は、当初4部門に別れており、展示資料は約2,000点である。後の90年に第4部門から「採炭作動室」を独立させて追加投資をおこない5部門となった。

(1) 本館(1, 2階)は、展示面積 952 m<sup>2</sup>で、「全体を12のテーマにわけ、石炭の生成・分布・利用から炭鉱の開発・技術の変遷などを実物資料やジオラマ・スライドボックスの映像音響をつかって紹介」する。

(2) 炭鉱風俗館は、展示面積 208 m<sup>2</sup>で、「明治・大正・昭和と三つの時代に分け、31体の人形を使って当時の採炭技術や服装・坑内用具などを忠実に再現」している。

(3) 炭鉱機械館は、展示面積 430 m<sup>2</sup>で、「炭鉱坑内外で使われている機械類や機器を展示し、使用箇所や動力・用途などを紹介」する。

(4) 史蹟夕張礦は、展示面積は 365 m<sup>2</sup>で、かつて坑道として使用し、模擬坑として使用されていたもので、「小規模炭鉱ともいえる内容」で「内部には上添坑道・ゲート坑道・採炭切羽(ロング)・斜坑などがつくられ、またロードヘッダー・ドラムカッターなどの掘進・採炭用機械、ボーリングマシーン、D・Cコンベアなどの保安・運搬機械も組み込まれており、現在の炭鉱と同じ設備を見学できるようになっている。」

なお、本館から風俗館への入り口は、立坑を模して作られ、実際に地下に降りる錯覚をおぼえる仕掛けになっている。また史蹟夕張礦の出口には、北海道の天然記念物に指定されている厚さ7.2メートルの石炭層の露頭が見られる。

工事は1979年7月からはじめられ、80年7月に完成しオープンした。工事費は、第7表に示したように、1986年段階までに12億5,459万円であった。その後、「採炭作動館」が増設され追加投資されて、98年の資料では16億2,986万円となった。

第2の柱の「炭<sup>やまの</sup>鉱生活館」は、「炭鉱のまち夕張で生活した人々の百年

第7表 石炭博物館建設総工費（第1次計画）

（単位：万円）

・博物館本体工事費	37,538
・博物館展示工事費	16,359
・博物館備品購入費	1,825
・博物館外構整備工事費	7,221
・博物館立坑掘削工事費	4,500
・博物館立坑エレベーター工事費	13,960
・博物館水平坑道工事費	16,809
・博物館水平坑道展示工事費	8,356
・博物館史蹟夕張礦工事費	13,791
・博物館史蹟夕張礦展示工事費	5,098
計	125,459

（注）前掲「石炭博物館」による。

の歩みを紹介し、失われつつある炭鉱の貴重な生活遺産を保存し管理する目的で建設」された。

建物の概要は、鉄筋コンクリート造2階建、敷地面積 931 m<sup>2</sup> 建設面積 267 m<sup>2</sup>、延床面積 517 m<sup>2</sup>。工事は、1980年10月からはじめられ81年6月に完成。建設総工費2億3,334万円であった。

第3の柱の「SL館」は、「館体前面が巨大なSLになっており、館内には待合室、役務室、改札口、プラットホーム、SL2台、客車1台があり、実際に使った資料が展示されている。」

建物の概要は、鉄筋造平屋建、敷地面積 2,113 m<sup>2</sup>、延床面積 580 m<sup>2</sup> であった。工事は79年9月にはじめられ80年9月に完成した。総工事費1億7,174万円。

第4の柱の「知られざる世界の動物館」は、「世界中の珍しい動物の剥製を展示」したものの。木造平屋一部2階建、敷地面積は1,229 m<sup>2</sup>、延床面積 1,224 m<sup>2</sup>、展示資料 1,100点。

82年12月から工事をはじめ、83年6月に完成。総工事費4,296万円。

以上で「石炭の歴史村」博物館施設の総工事費は、約20.8億円であった。なお「石炭の歴史村」の敷地15ヘクタールは、当初北炭が無償で提



供してくれることになっていたが、北炭がこの土地を抵当に入れていたことから、結局1億7,300万円で買いとらなければならなかった<sup>(2)</sup>。

なお夕張市の投資によってスタートした「石炭の歴史村」は、1980年に第3セクター「株式会社石炭の歴史村観光」が設立され、市長が社長に就任した。資本金は6,000万円。82年に1億円に増資した。「株式会社石炭の歴史村観光」は、一連の観光施設の経営を委託され、「その収入はすべて市に納入され、その代わりに運営費の交付を市から受けている。」<sup>(3)</sup>。

その他、水上レストラン「望郷」(81年オープン)、大型遊園地「アドベンチャーファミリー」(83年6月完成)、旧小学校を改装した宿泊施設「ファミリースクール・ふれあい」(83年7月開設)、グリーン大劇場(1万人収容)(83年8月完成)、などの付属施設が建設された。

こうして1983年6月「石炭の歴史村」は、全面オープンするはこびとなった。

全面オープンに際して、マスコミはいっせいに注目し、記事を掲載した。たとえば、北海道新聞は「予想を上回る日曜の人気」「見て楽しんだ『石炭の歴史村』」の見出しで、「石炭の歴史村」の成功を報じた。

夕張市は、全面オープン以後もさまざまな観光施設の建設、および観光化の施策をおこなった。

主なものをあげれば、第8表に示したように、84年12月のサイクリングターミナル『黄色いリボン』(80名収容の宿泊施設)開設、85年農産物加工センター『メロン城』開設、86年4月「アドベンチャーファミリー」に大観覧車・グレートポセイドンを追加、同年10月民「ホテル・シュエパロ」(収容人員135名)オープン、87年5月サイクリングロード開通、同8月滝の上公園・千鳥橋完成、83年4月「ロボット大科学館」開館、同年7月「アドベンチャーフォール」オープン、バラ園開園。などが第1次計画の追加建設であった。

こうして「石炭の歴史村観光」投資は、1986年頃までに64億円に増大していた<sup>(4)</sup>。



第8表 夕張観光開発事業の経緯

年・月	事 項
1979年4月	夕張市長に中田鉄治就任「石炭の歴史村」事業に着手
7月	メロンブランデー醸造研究所開設、試験研究開始
80年7月	第3セクター「㈱石炭の歴史村観光」設立、資本金6千万円
〃	「石炭博物館」開館
9月	「SL館」開館
81年8月	「炭鉱(やまの)生活館」開館
12月	水上レストラン「望郷」開設
82年1月	㈱石炭の歴史村観光、資本金8千万円に増資
3月	㈱石炭の歴史村観光、資本金1億円に増資
83年6月	「知られざる世界の動物館」開館、大型遊園地施設「アドベンチャーファミリー」の完成により「石炭の歴史村」全面オープン。
7月	旧旭小学校をホテルにリフォーム「ファミリースクールふれあい」として開設(収容人員450名)
8月	「グリーン大劇場完成」(1万人収容)
84年8月	メロンリキュール「めろん酒」発売
12月	サイクリングターミナル「黄色いリボン」開設(収容人員80人)
85年2月	農産物処理加工センター「めろん城」開設
10月	夕張勤労者野外活動施設開設
12月	めろん通年栽培場の完成
86年3月	経済同友会賞「美しい都市づくり賞」受賞
4月	アドベンチャーファミリーに大観覧車「グレートポセイドン」完成
10月	「ホテル・シューパロ」オープン 客室数63室(収容人数135名)
〃	メロンブランデー出荷
87年3月	「空知山岳ワールド」構想策定
5月	サイクロングロード開通
6月	「新生」夕張地域おこし計画策定
8月	滝の上公園・千鳥橋完成
88年1月	石炭の歴史村第2計画「ゆうばりドリーム」策定
3月	松下興産(株)夕張進出・夕張バイナレー(株)設立。レースイスキー場を核に民活による本格的リゾート開発の始動(当初雇用従業員200名)
4月	「ゆうばりロボット大科学館」開館
6月	北海道東海大学・バイオ試験農園開設
7月	「アドベンチャー・フォール」オープン、バラ園(ローズガーデン)開園
8月	夕張美術館を新装開館
10月	北海道新聞広告賞受賞
11月	農産物処理加工センター第2工場開設
89年4月	「サイクリングロード富野休憩所」完成
〃	長芋スピリット「ゆうばり寅次郎」「ワイン・シューパロ」「夕張メロンワイン」、夕張石炭焼珈琲「翔」発売
〃	めろん城公園(やまべ養殖場)、イベント館「アラム砦」完成
5月	めろん酒「農林水産省食品流通局長賞」受賞
〃	北海道新聞広告賞受賞(2年連続)
12月	ホテルシューパロ増築 客室数156室(収容人数399名)

第8表 つづき

年・月	事	項
1989年12月	夕張バインバレー社員寮「レースヴィレッジ」完成	
〃	松下興産(株)ホテル建設に着手	
90年1月	「幸福の黄色いハンカチ思い出ひろば」開設	
2月	第1回ゆうばり国際・冒険ファンタスティック映画祭 97 開催	
3月	「ゆうばりシネマドリームランド」構想策定	
〃	「活力あるまちづくり優良地方公共団体」として自治大臣表彰	
4月	「めろんゼリー」発売	
〃	石炭博物館に「採炭作動館」併設	
91年1月	松下興産(株)ホテル「Mt・レースイ」竣工	
2月	第2回ゆうばり国際・冒険ファンタスティック映画祭 97 開催	
9月	夕張市観光物産センター「カサブランカ」開館	
〃	北海道観光物産センター夕張店(榎福屋観光)がオープン	
92年2月	第3回ゆうばり国際・冒険ファンタスティック映画祭 97 開催	
4月	ゆうばり国際冒険ファンタスティック映画祭がフジサンケイグループ広告大賞(イベント)受賞	
〃	高級メロンゼリー「夕張」発売	
5月	スイートワイン「夕張めろん」「ウメ」「ハスカップ」発売	
10月	「ホテル・シューパロ」松下興産(株)へ売却	
11月	夕張メロンワイン「ヌード」発売	
93年2月	第4回ゆうばり国際・冒険ファンタスティック映画祭 97 開催	
6月	「花とシネマのドリームランド」一部開園 (平成4年度～11年度継続事業)	
〃	「めろん観光農園」開園	
〃	スイートワイン「チェリー」「アップル」「ストロベリー」発売	
94年2月	第5回ゆうばり国際・冒険ファンタスティック映画祭 97 開催	
〃	寅次郎「シネガボトル」発売	
4月	石炭の歴史村、バスポート料金制度に変更	
〃	「夕張鹿鳴館(旧北炭鹿の谷倶楽部)」改装オープン	
5月	「夕張市平和運動公園」一部供用開始	
6月	「メロンシャンプー」「メロンソープ」発売	
10月	第3セクター「夕張観光開発(株)」設立、資本金3千万円	
95年2月	第6回ゆうばり国際・冒険ファンタスティック映画祭 97 開催	
4月	アイスクリーム「夕張メロン」「ハスカップ」発売	
〃	ゼリー3品セット「夕張北方果樹園」発売	
96年4月	旧夕張北高等学校を宿泊施設にリフォーム「ファミリースクールひまわり」開設(収容人数540名)	
97年2月	第7回ゆうばり国際・冒険ファンタスティック映画祭 97 開催	
4月	長いも焼酎「ゆうばり寅次郎」新発売	
10月	「ゆうばりホテルシューパロ」夕張観光開発(株)の運営により再オープン	
12月	「ゆうばりユーパロの湯」オープン	
98年2月	第8回ゆうばり国際・冒険ファンタスティック映画祭 97 開催	
4月	チーズケーキ「アルプ」発売	

(注) 夕張市資料による。

発、誘致施設計画、大型建設事業促進計画、市街地整備計画、と観光開発計画を立案した。世は、まさにバブル経済の真っ盛りであった。

この観光開発計画は、おりからバブル経済の雰囲気におされ、今にして思えばあまりにもバブリーな計画であった。すなわち、夕張市に加え芦別、赤平、三笠、歌志内、上砂川の6市を包括するリゾート構想である『空知山岳ワールド』構想を基本方向として、夕張市の地域観光開発構想は、事業費686億円という壮大なものであった。その骨子は、以下のとおり。

- (1) 夕張ワールドリゾート開発。事業費270億円。夕張岳に国際級スキー場の建設を中心に、リゾート都市、ゴルフ場を建設。
- (2) 第2歴史村建設。事業費129億円。果樹園、各種パーク、モーターサイクル競技場など建設。
- (3) レースイリゾート開発。事業費128億円。レースイスキー場の再開発と施設の増設。高原ゴルフ場の建設。

その他、夕張バカンス村建設事業66億円、「石炭の歴史村」拡充事業40億円、バイオ園芸コンビナート建設事業20億円、ゆうばり観光牧場建設事業20億円、などである。

構想としては大変興味深いものであるが、バブルが弾けてみると、とてつもない空想に近い絵餅にすぎない。とはいえ、夕張市の観光が、そうした壮大なものであってはならないということはない。余暇市場の好転と推進主体の確実性、投資額の抑制によっては、十分に見直しの価値はあるように思える。

ともあれ、こうした大構想がまだ計画の段階で、日本経済は90年に入って株価の暴落を景気に一気にバブル経済を弾き、転落の一途をたどった。大構想は、絵に書いた餅と化した。が、「石炭の歴史村」の観光施設を補充するいくつかの計画は実現されていった。

具体的には、第8表のとおりであった。88年3月松下興産を誘致してレースイスキー場の再開発。89年4月「メロン城公園」、イベント館「アラモ砦」完成。同年12月「ホテルシュエパロ」増築（客室63室から156

室へ、収容人員135名から399名へ)、90年1月山田洋二監督高倉健、武田鉄也、桃井かおり主演の人気映画「幸せの黄色いハンカチ」思い出の広場の開設、同年4月炭鉱博物館に「採炭作動館」併設、91年9月夕張市観光物産センター「カサブランカ」開館、93年6月ゆうばり「花とシネマのドリームランド」一部開設、同月めろん観光農園開園、94年4月「鹿鳴館(旧鹿の谷北炭倶楽部)」(観光用)オープン、95年4月旧北高等学校を宿泊施設にリフォーム「ファミリースクールひまわり」開設(収容人員540名)、96年7月「ホテルシュエパロ」(一時松下興産に売却していたものを20億円で買収)開館、同年12月「ゆうばりユーパロの湯」(温泉施設、建設費12億円)オープン。

こうして夕張市「石炭の歴史村観光」のための開発投資は、最終的(1997年現在)には113億までふくらんだといわれている<sup>(6)</sup>。

以上のように、夕張市は炭鉱から観光に産業の中心を転換し、観光地として再生した。その目的は、一応達成されたと評価できるであろう。

#### 注

- (1) 石炭博物館についての解説は、『夕張市石炭の歴史村石炭博物館』(パンフレット)、1988年、による。
- (2) 前掲青野書、83頁。
- (3) 同上、85頁。
- (4) 同上、86頁。
- (5) 夕張市『「新生」夕張地域おこし計画』、1987年6月。
- (6) 『朝日新聞』1997年5月7日、夕張市の観光開発に関する記事。

#### 4. 夕張市の活性化と「石炭の歴史村」観光の経営

では夕張市の観光地化による再生策は、どのような具体的な結果を生んでいるのであろうか。ここで夕張の地域活性化の状況について見ることにしよう。

1974年から建設をはじめ、80年にオープンした「石炭の歴史村」観光

は、夕張市への大量の観光客の誘致に成功した。

第9表に示したように、「石炭の歴史村」観光が全面オープンした1983年の「石炭の歴史村」入場者数は、55万5,600人を記録し、その後上下変動をかさね、90年半ばに51万人を維持している。1地域の博物館を中心とした小テーマパークとしての「石炭の歴史村」観光としては相当の実績と評価できるであろう。

夕張市の観光は、この「石炭の歴史村」観光を軸に、いくつかのスポットをもっている。市内から車で10分ほどのところに標高650メートルの丁未風致公園があり、27ヘクタールの広々とした敷地内には、フィールドアスレチック、キャンプ場、野外バーベキューコーナー、などの施設があり、夕張岳、日高連峰、石狩平野や日本海の展望がすばらしい。ここには毎年数万人が立ちよっている。

また滝の上公園は、豊かな自然と夕張川の溪谷のすばらしい眺望に87年に開設して以来、数万人から10万人以上の観光客を集めている。

夕張市は、その他様々な施設をようしている。スポーツ施設、小学校、高校の校舎を改造してつくった格安の宿泊施設は、青少年の合宿所や研修所として利用され、多くの客を集めている。高級特産品夕張メロンをはじめ、たくさんの特産土産品を加工販売しており、北海道観光旅行客を立ちよらせている。それは「その他」の観光客としてカウントされている。

数字はあがっていないが、「幸せの黄色いハンカチ思い出広場」には、たくさんの観光客が立ちよっている。映画の背景になったスポットが、観光客の足を引きつけるのは世界共通の傾向だが、夕張をテーマにしたドラマがもう一つ欲しいものである。

マウントレースイスキー場は、1993年の開設以来、30万人台の来場者を記録し、「石炭の歴史村」の冬枯れ期の観光客減少をカバーしている。

こうして夕張市への観光客の入込み数は、83年のオープン期の120万人台から3年後には200万にたっし、その後今日まで200万人の水準を維持している。

第9表 夕張市観光客入込み数調べ

(単位:人)

年度	石炭の 歴史村	丁未風致 公園	ゆうばり ユウバロ の湯	滝の上 公園	マウント レースイ	その他	合計
1976							349,920
78							410,371
80							552,256
82							619,497
83	555,629	114,400	—	—	—	511,971	1,203,400
84	500,986	128,000	—	—	—	1,086,114	1,725,400
85	433,298	61,525	—	—	—	1,378,977	1,879,800
86	372,250	63,910	—	—	—	1,633,240	2,077,000
87	380,008	53,180	—	—	—	1,640,812	2,079,000
88	582,642	59,630	—	63,345	—	1,307,240	2,016,630
89	456,529	51,580	—	69,800	—	1,401,152	1,981,261
90	452,455	52,430	—	66,854	—	1,450,283	2,022,022
91	422,125	55,300	—	96,520	—	1,731,476	2,305,421
92	426,909	40,522	—	111,055	—	1,569,505	2,147,991
93	422,308	41,865	—	123,862	408,466	1,308,044	2,304,545
94	515,305	40,040	—	114,141	390,698	1,066,399	2,126,583
95	518,648	39,790	—	121,359	393,965	951,138	2,024,900
96	515,859	42,345	75,755	115,989	330,933	921,557	2,002,438

(注) 夕張市「夕張観光開発事業の経緯」および北海道観光連盟による。

このように、夕張市の第1次観光計画以前には、夕張市への観光客の入込み数は、1976年約35万人、78年41万人であったものが、石炭博物館のオープンした80年には55万人、さらに全面オープンした83年には一挙に120万人に増加し、「石炭の歴史村」観光効果は、70～80万人観光客の誘致となって現れている。これを長期的にみれば、「石炭の歴史村」そのものには、年間40～50万人しか入場者はいないが、それを中心とした夕張観光は、ほぼ150万人の観光客を誘致したことになる。

200万人の観光客の夕張市にあたる経済効果は、市の試算がないようであるが、相当の額になると思われる。

ちなみに北海道における観光客入込み数では、1985年現在で北海道の観光地の中で第15位の地位をキープしており、入込み数だけでは小樽、富良野、ニセコなどと肩を並べて北海道の有力な観光スポットとなっている<sup>(1)</sup>。

夕張市の活性化は、観光事業による雇用の創出にも現れている。日本では、バブル崩壊まで超完全雇用であったために、新事業の展開による雇用の創出にたいする意義づけが稀薄だったが、現在のように雇用の冷却期にいたってみると、観光化事業による夕張市の雇用創出の意義は大きかったことが改めて強調されなければならない。

建設期の雇用創出をのぞいても、後に示す第11表にあるように、「石炭の歴史村観光」社員は、オープン時の1983年の52名から96年には213名を数えている。レースイスキー場のホテル経営は、当初従業員200名を予想したが、100名前後のようである。スキーシーズンには、アルバイトが200名ほど採用されている<sup>(2)</sup>。

また市の職員についても他の市では観光課はせいぜい2、3人が商工部の片隅におかれるが、夕張市では観光部のもとに観光課をおき、12名の職員を配している<sup>(3)</sup>。

この他、観光化によって、農業の維持、土産品の製造、販売に係わる労働力数は、今ここで夕張市の観光化によって創出した労働力数を推計する

ことができないが、そうとうの数にのぼることは間違いない。

夕張市の観光化にともなう経済の波及効果は、相当に大きいと思われるが、ここではその推計を検討する余裕がないので、別の機会をまちたい。

夕張市の人口についていえば、観光化によっても、人口の減少傾向に歯止めはかかっているが、急減を抑制する効果は著しいものがある。

つぎに「石炭の歴史村」観光の経営状況について見ておこう。「石炭の歴史村」観光の売上額は、第10表に示したように、全面オープン時の1983年には7億1,151万円だったが、88年には20億9,823万円、92年には30億971万円、不況下の96年でも29億8,567万円を維持している。全体としては観光の中軸である「石炭の歴史村」観光は、成功裡に推移していると評価できるだろう。

ちなみに「石炭の歴史村」観光は、他産業の売り上げと比較してみると、1996年度の農業生産額は41億であり、製造業出荷額は97億円（96年度）であり、商業の販売額は249億（94年度）であるが、卸売部門に匹敵する大きさであり、他の産業と肩を並べて有力産業の一角をなしている。

また「石炭の歴史村」観光の収益は、83年には1億1,154万円の赤字を記録しているが、翌年から黒字に転じ<sup>4)</sup>、88年には3億1,943万円の黒字額を計上している。その後厳しい不況下で収益は停滞しているが、景気の回復後は、収益の改善が予想される。

第10表 「石炭の歴史村」観光売上状況及び観光客入込数等調

(単位：1,000円)

年度別	売上額	当期損益	石炭博物館 観光客入込数	社員数 (年度末)
1980年	51,577	▲ 62	81,103	15
83年	711,518	▲111,546	486,771	52
88年	2,098,233	319,436	543,246	138
92年	3,009,717	102,269	554,944	195
96年	2,985,678	39,045	620,178	213

(注) 夕張市「石炭の歴史村」観光からの提供資料。

注

- (1) 前掲青野書, 70頁。
- (2) 1997年におこなったホテル「マウント・レースイ」での聞き取り調査による。
- (3) 『夕張市勢要覧資料編』平成9年度, 18頁。
- (4) 前掲青野書, 86頁。

## 5. 夕張市の観光開発の問題点

以上のように夕張市の観光開発は、他の鉱山観光と根本的に異なったコンセプトで、炭鉱遺蹟を中心とした「石炭の歴史村」観光に、遊園地、その他、各種の公園、スポーツ施設、さまざまなレクリエーション施設を併設した一大レジャー施設の建設であった。夕張市の市長をはじめ、関係者、一般市民の努力は大変なものがあったと推察される<sup>(1)</sup>。

最後に夕張市の観光開発の中に潜む問題点について、若干指摘しておく。第1に指摘したいことは、夕張市への観光客の入込み数の中身である。夕張市への観光客入込み数の200万人、「石炭の歴史村」観光への入場者数50～60万人は、確かに評価すべき大きな数字である。

しかし夕張市の観光地化の観点からは、その中身に不満がのこる。第11表を見られたい。夕張市の観光客の形態を二つの面から見てみると、一つは、観光客がどこからきているかで、道内の客が89年に95%であり道外の観光客はたったの5%にしかすぎない。97年には道外の客が1%増えて6%になっているとはいえ、本土からの観光客が圧倒的に少ないことがわかる。近年、国民的テレビドラマ「北の国から」の舞台として観光客に注目されている富良野市は、1997年に203万人の観光客を迎え入れているが、道外の客が22.4%にもたっている。

道内からの観光客だけでは、リピーターが続出しないかぎり、すぐに観光客は頭打ちになってしまう可能性が高い。これを防ぐためには、道外の観光客の誘致が必要であることはいままでもない。この点を配慮する対策

第11表 夕張市の観光客の状況

	夕張市ビジターの滞在状況（道内外別）				富良野市の場合	
	1989年		1997年		1997年	
	客数	%	客数	%	客数	%
日帰り客	1,913,464	96.6	1,923,636	95.0	1,529,205	75.2
宿泊客	67,797	3.4	101,264	5.0	503,262	24.8
宿泊延数	75,334		112,515		528,424	
道内	1,881,929	95.0	1,903,406	94.0	1,577,422	77.6
道外	99,332	5.0	121,494	6.0	455,045	22.4
総数	1,981,261	100.0	2,024,900	100.0	2,032,467	100.0

(注) 宿泊延数は、1人×宿泊数である。

『余暇・レジャー総合統計年報』97～98年から作成。

が当事者によって試みられていると確信するが、今一つ問題がのこる。

たとえば、1989年についてみると、北海道への観光客は、道外から360万人、道内から805万人である。その内、夕張市を訪れている観光客は、道内からが2.3%、道外からが0.2%である。道外からの観光客の比率が、まだ著しく低いことがわかる。このことから、道外の観光客を誘致する余地がまだ十分にあることがわかる。

夕張市の観光客の滞在の仕方、滞在日数の少ないことも問題である。夕張市の観光客は、道内の客が多く、したがって日帰り客が多く、市内に宿泊する客が圧倒的に少ない。1989年に日帰り客は96.6%、宿泊客は3.4%にしかすぎない。97年に宿泊客は、1.6%ふえて5%となっているとはいえ、夕張市の観光客は、滞在しないで通り過ぎてしまう。当然彼らが市内に落とす金が少なくなることはいうまでもない。

夕張市が観光地化を標榜するのであれば、観光客をもっと市内に滞在させることが重要である。ちなみに富良野市についてみると、24.8%が宿泊客である。観光地としての質の高さを示している。

こうしてみると、夕張市観光は、まだローカルの色彩が強い。道内の観光客には限界があるわけで、道外の観光客に期待し、全国的な観光地化の努力が必要であろう。

さらにいえば、1人の宿泊数が多ければなお質の高さを示すのだが、夕張市の宿泊者は、人数が少ない上に、宿泊数も、1人1.1泊にしか過ぎない。これは富良野も同じで、日本人の連続休暇の少なさと宿泊料金の高さを反映している。

この点にからんで、一言しておけば、夕張の観光政策をもっと充実したものにしていくためには、あれだけの施設、観光スポットがあるのだから、観光客を少しでも通過型から滞在型の客に変えていくことが可能であり、また必要なことであろう。

滞在客数と宿泊能力にはまだ相当ギャップがあり、宿泊施設の充足率は低い。89年を例に、宿泊施設の受入れ能力人員数は、機械的推計だがおよそ57万人であるが、実際は10万人しか宿泊していない。

そのためには、宿泊施設の充実もはからなければならない。バブル期のように、やたらに豪華な宿泊施設はそれほど不要である。とくに夕張市の場合、家族づれ、子供づれが多いので、今必要なのは安価で清潔で簡便な宿泊施設である。すでに二つの閉鎖学校を改修して、格安の宿泊施設に変えたアイデアは、高く評価されてよいであろう。しかしそれらの施設は、合宿用が主で、まだ家族用に改造されていないような気がする。

第12表 夕張市の観光客収容人員

(単位：人数)			
開設年	施設名	1日収容人員	年間収容人員
1983年	「ふれあい」	450	162,000
84年	「黄色いリボン」	80	28,800
85年	「ひまわり」	540	194,400
86年	「シューパロ」	135	48,600
89年	同上増築	280	100,800
91年	「Mt レースイ」	236	84,960
年間合計 91年基準		1,586	570,960

(注) 各種資料から作成。  
年間収容人員は30日×12ヶ月とした。

たとえば、イスラエルのキブツの観光客受入れ施設のように、普通の住宅（夕張市の場合は炭鉱住宅を改装して使用すればよい）を観光客に供給し、食事は自炊も可能にし、さらに大きなレストランを併設して、安価な宿泊施設を供給したりするのも一考であろう。また民宿型の宿泊施設の開発も必要であろう。そうすれば、大人も子供ももっとのんびり夕張市に滞在して各種のレジャーを楽しむことができるのではなかろうか。

つぎの問題点は、夕張の炭鉱遺蹟の観光化は、いくつかの理由があるとはいえ、炭鉱遺蹟自体が十分に利用されないで、新しい建物の建設投資に多くの資金を投資していることである。

すでに指摘した「ハコモノ」文化の影響が色濃いということである。すなわち、夕張の石炭博物館は、イギリスの炭鉱ミュージアムに見られるような旧炭鉱設備を全面的に利用するような形になっていない。模擬坑と機械類は、全面的に古いものが利用されたが、本館の博物館本館は、新しく建造された建物であり、立坑も本物の立坑が利用されたのではなく、新しく建設された。博物館から模擬坑につながる炭鉱風俗館、炭鉱機械館のための水平坑も新たに開さくされている。炭鉱生活館についても、旧炭鉱施設が利用されるのではなく、新たに建設された。炭鉱住宅の実物をディスプレイする試をしてもよかったと思われる。

新しい建物を建てれば、膨大な観光投資が必要となるだけでなく、それでは真の炭鉱遺蹟を保存するという意味からも、また観光客にとっても炭鉱遺蹟のリアリティの面からも不満がのこる。

しかし日本と夕張市の事情を考えると、こうした指摘はあまり厳しすぎる気もする。何故なら、北炭自体が倒産に見舞われ、抵当に入ってしまった「石炭の歴史村」の敷地さえ、寄付をうけるどころか、市が買わなければならないほどである。また炭鉱の坑道、建物の利用についても、イギリスのように地震がなく、地層の構造上、坑内の基盤がしっかりしていて、また建物も煉瓦できていて耐久性に富んでいるのと異なって、日本の場合、坑内の基盤が脆弱で、坑道の維持が難しく、建物も木

造で耐久性が著しく弱く、さらに保安基準の厳しさもあって、とくに坑内の旧施設の利用が困難であったという事情を想起しておかなければならない。この点は、金属鉱山の坑内基盤がしっかりしていて、旧坑内を見学させるケースとも大いに異なっている。

また炭鉱の博物館としては、炭鉱が閉山し、夕張市が危機的な状況にある時に、実物を中心とした博物館の設置は、逆に一地方都市のなしうる事業ではないかもしれない。むしろ国立歴史博物館や民俗博物館のように国家的な取組みをようするテーマであった。

第3に、夕張市の観光開発は、単に炭鉱遺蹟の観光資源化にとどまらず、夕張市全体の観光地化を総合的に展開されたことである。「石炭の歴史村」だけで、夕張市の過疎化を阻止し、市の活性化をはかるのには限界があったからである。

産業遺蹟の観光資源化というテーマだけで見るのであれば、炭鉱博物館はもっと充実することが望まれるところであるが、炭鉱博物館だけで、今日のように観光客を200万人も集めることは困難であろう。したがって、中田市長が、夕張市全体の観光地化を試みたことは、むしろ当然であり、他の地域の比較的単発の鉱山博物館と根本的に異なっているところと評価すべきである。

「石炭の歴史村」建設のほか中田市長は、観光政策の一として、夕張農業の振興をはかり、夕張市の代表的な名産として成長した夕張メロンに、さらに付加価値を高めるべく、79年にメロンブランド醸造研究所を設立し、観光土産品として84年にメロンリキュール「めろん酒」を発売し、85年に農産物処理加工センター「メロン城」(醸造工程を見学できる)を開設した。89年にはレモンワインも発売した。こうして夕張市のメロン生産額は、96年には約39億円を維持し夕張市の農業生産の93%にも達している。こうした観光と直結した農業政策も大いに評価されなければならない。

とくに子供たちが楽しく遊べる遊園地施設を拡充し、83年に旧小学校

を改装して廉価な宿泊施設に改造したり、87年にサイクリングロードを敷設し、その95年には旧高校を同じような宿泊施設（540名収容）に改造し、滞在型の集客につとめていることも評価できる。

また88年には、松下興産を誘致して小規模ながらレースイスキー場を開設し、冬場の観光客誘致に成功している。

第13表に示したように、夕張市の観光客の季節性は、比較的マイルドになっている。とくにスキー場開設による冬期の観光客を維持していることは評価される。

また全体として市の観光客誘致の市をあげての努力は、大変なものがある。たとえば、90年1月には第1回「ゆうばり国際映画祭」を開催し、以後継続し文化イベントの中心となっている。またさまざまなイベントを開催し観光地夕張の名を高めている。こうした努力なしに200万人の観光客を夕張に集めることはできなかったであろう。

つぎに、債務過剰投資の傾向についてもふれておきたい。いうまでもな

第13表 夕張市月別観光客数

年・月	89年度		91年度	
	客数	%	客数	%
1989年4月	26,995	1.4	72,339	3.4
5月	138,693	7.0	240,804	11.3
6月	90,206	4.5	172,760	8.1
7月	123,225	6.2	260,859	12.3
8月	276,866	13.9	358,665	16.9
9月	87,679	4.4	180,601	8.5
10月	59,972	3.0	126,928	5.9
11月	13,277	0.7	19,334	0.9
12月	142,068	7.2	115,160	5.4
1990年1月	470,617	23.8	255,538	12.0
2月	399,214	20.1	250,494	11.8
3月	152,449	7.7	73,131	3.4
合計	1,981,261	100.0	2,126,583	100.0

(注) 前掲「余暇・レジャー総合統計年報」より作成。

く衰退産業をかかえた地方自治体の財政は困難である。資金がないから何もできないでは、政治は無である。中田市長は、夕張市観光地化大構想を実現するために、あらゆる手段、方法を講じて資金を調達する努力をおしまなかった<sup>(3)</sup>。

夕張市は、観光開発のための総額 113 億円を投資したほか、多くを市債の発行によってさまざまな事業にチャレンジしてきており、その累積残高は 190 億にもたっているといわれているが<sup>(3)</sup>、夕張市の歴史的事情を考えるとやむをえない側面が強い。むしろこうした歴史的・特殊事情のある自治体の観光化にたいしては、日本の場合政府の観光政策の欠如もあって、国家的な投資をさけてきたことが問題である。

周知のように、飛行機のとばない農産物運搬用の飛行場建設や寄港する船舶の少ない巨大港湾施設の建設、観光客のこない寒村に巨大な観光施設の建設、農民のいなくなった農地での大灌漑工事、など数え上げればきりがなが、これまでのばら蒔き公共投資（正確には非公共投資）のことを考えると<sup>(4)</sup>、炭鉱遺蹟の観光資源化による地域起しのような政策には、大胆な公共資本の投資があつてしかるべきだったのである。そう考えるなら、本来なら夕張市の今日の膨大な赤字など生じなかったかもしれない。こうした点を無視して、赤字や債務の多さを一面的に批判する「朝日新聞」の記事は<sup>(5)</sup>、公正さに欠けるし、産炭地の悲劇的な歴史を配慮しない冷酷な視点というべきかも知れない。

最後に一言しておけば、夕張市の産業遺蹟の保存には、観光開発におけるボランティア性を欠いていると指摘せざるをえない。こうした傾向は日本で一般的であるのだが、しかし十分考慮すべきことであつた。

炭鉱閉山の最中に、炭鉱遺蹟を保存し、後世にのこそうという試みは、夕張市の努力だけでなく、広く世論に訴えて、とくに 1960 年に日本の世論を盛り上げた三池闘争の経験をもつ炭鉱社会であつてみれば、一般国民はもとより、労働組合が、炭鉱遺蹟の保存をボランティアに取り組んでしかるべきだつたように思われる。そうした配慮が、夕張市には十分でなかつ

たように感じられる。

たとえば、「石炭の歴史村」トラストや友の会といった支援団体を組織して、資金を集め、会員には割引の入場券を発行したり、とくべつのイベントをおこなったりして多くの観光客を集めることが必要だったのではなかろうか。

ともあれ、日本で唯一の壮大な炭鉱遺蹟の観光資源化の試みである夕張市のケースは、産業遺蹟の観光化という研究テーマにとって興味深い研究対象であり、私は今後とも注目していきたい。

#### 注

- (1) 詳しい夕張市職員の努力については、青野前掲書、第6章を参照。
- (2) 詳しくは、同上書、第5章を参照。
- (3) 前掲「朝日新聞」1997年5月7日の記事。
- (4) 五十嵐敬喜他『公共事業をどうするか』、1997年、岩波新書参照。
- (5) 前掲「朝日新聞」の記事。